

## 古代アステカ社会における 「戦争」の機能

井 関 睦 美

### はじめに

アステカ文化は、スペイン人によるアメリカ大陸の植民地化直前まで繁栄した中米（メソアメリカ）古代文化の一つである。現在のメキシコ盆地を拠点に、14世紀前半からスペイン人による征服（1521年）まで繁栄した。アステカ社会に特徴的な、交渉・戦闘・捕虜の確保・事後の捕虜の人身供犠という一連の行為は、現在では一般に「戦争（warfare）」という言葉で表現されている（Hassig 1988）。記録されてきた数々の人類史上の戦争や現在私たちが経験している戦争とはかけ離れたイメージを持つことから、アステカ文化研究に携わる一研究者として、アステカ文化の文脈で使用する「戦争」という言葉にはしばしば違和感を感じてきた。一般向けのアステカ文化に関する講演会でも、アステカの戦争については「何を目的として戦ったのか」「どんなコスチュームで、どんな武器を使っていたのか」「兵役はあったのか」「捕虜を捕らえる理由は？」「生贄の目的は？」「生贄にされる、または生贄の儀礼を目にする心境は？」といった質問を受けることが多い。

本稿では、このような違和感の原因を探るため、「アステカの戦争にどのような機能があり、どのような機能がなかったのか」に焦点を当てて考察する。その際、現代日本人の持つ戦争観、およびアステカ以外の古代メソアメリカ文化圏における戦争観や戦争に関わる表現との比較分析を行う。

本稿の構成は以下の通りである。1章では、現代日本人が一般的に持っていると考えられる「戦争」の特徴をまとめる。2章では、古代アステカ文化の物質文化や植民地時代の文献史料および先行研究をもとに、アステカの戦争の特徴を概観する。3章では、アステカの戦争に関連する図像表現と、植民地時代の美術様式およびメソアメリカの他文化の様式との比較を通して、アステカ社会において強調されていた戦争の要素を抽出する。4章では、1章で挙げた現代的戦争観の特徴と、2章・3章のデータをもとに、アステカの戦争の社会的機能に関して論考をまとめる。「おわりに」では、アステカの戦争を新たな視点から研究する上で、今後必要な方法論を提案する。

## 1. 現代人の「戦争」観

軍事学や戦争学の分野では、人類はその誕生以来、戦争を繰り返していたと考えられている（ガット2012；石津2013：84）。ヨーロッパ、中東、アジアなどを含む旧大陸で歴史上経験されてきた戦争は、多くの場合、敵を殲滅し屈服させる目的で行われ、大量殺戮、敗北した国家の消滅および社会体制の崩壊、政治・経済・思想的変革などをもたらしてきた（ハワード2010）。戦勝国であっても、多くの庶民の犠牲や物資的消耗を伴う場合もあった。一方で、武器や兵器製造などの戦争に伴う産業は、大きな戦争の度に多くの利益を産み、世界的な技術革新を促してきたことも事実である（マクニール2002）。

アステカとの比較を念頭に置くと、現代人の持つ「戦争」のイメージは、以下の8項目に凝縮されるだろう。これらの特徴は、上記の戦争史や軍事学の研究成果を参考にはしているが、特定の時代や地域に限ったものではない。我々（一般的な日本人成人）が歴史的に経験してきた戦争や、学校教育で学んできた戦争に関する知識、日々のニュースで得る情報もふまえてまとめたもので、人類史上のあらゆる戦争にあてはまるものではないことを先に明記

しておく。

まず第1に、戦争とは、国家およびその他の政治的組織体の間で行われる大規模な争いで、特定の問題を巡って比較的小規模な組織が争うテロや紛争は含まない。第2に、戦争を行う政治的組織体には階層化された軍隊が存在し、「戦うこと」は社会的身分と関わってくる。これは、ヨーロッパ中世の騎士階級や、金銭で雇用される傭兵などのイメージも影響していると思われる。第3に、戦争行為には、政治的・思想的に正当化された暴力や破壊行為を伴う。第4に、破壊行為には、機動力のある家畜化された馬などの動物、火器、大量殺戮が可能な兵器などが使用される。旧大陸でも日本でも古くから馬を家畜化して騎馬戦が行われたし、13世紀頃からは火薬を使用した銃などの兵器がヨーロッパの戦場でも使用されるようになっている。第5に、破壊行為や殺戮行為は、敵の戦力を損なわせる、または根こそぎにするために行われる。第6に、しばしば兵器開発と技術革新、軍需産業と経済発展が連動する。例えば広い視野で概観すれば、火薬、航空機、原子力、宇宙開発などは、幾度もの戦争を経て発展し、日常生活水準の向上にも貢献してきている。多くの場合このような兵器開発に関わる技術開発が国家で保護され、大きな産業として世界経済にも影響を与えてきている。第7に、多くの戦争は、どこかの時点で勝敗がついて終結し、勝者は敗者の資源、領土、人間、財産、宗教・文化、言語などの所有権に対し影響力を発揮することができる。そして第8に、近代以降は、一般市民も戦争に参加し、国家と国民のアイデンティティが一体化する。19世紀半ば以降、ヨーロッパで国民国家が成立してからは、多くの国で兵役が義務となった。戦争関連の活動への参加により、個人が特定の国家の「国民」であるという明確なアイデンティティを持つように方向づけられてきたと言える。

現代社会では、国際社会上で戦争は国際法で規定（ルール）化されている。戦争は国際外交上あってはならない行為とされているが、各国は常に軍備や防衛に国家予算を割いて牽制し合っているのが実情であろう。一部の国家間

では、常に最終手段としての戦争の可能性を前提に外交が行われている場合もある。

一方で、アステカ王国史を記録した史料からは、戦争は外交の一手段であり、アステカ王国拡大の過程では、常時どこかと交戦状態だったことがうかがえる。しかし戦闘に参加する社会階級が限定されていたため、一般庶民は戦争自体に「アステカ王国民」というアイデンティティを見出すことはなかった。そのため、支配層は戦争捕虜を利用した宗教儀礼という形で、庶民に戦争を疑似体験させたと考えられる。また、馬のような家畜化可能な大型動物が存在せず、道具としての金属器を持たなかった石器時代水準の技術環境により、殺戮と破壊を主目的としない戦闘形態が創出された。広範囲な技術開発や産業発展の契機として、戦争をチャンスとして活用する発想にもつながらなかった。次章では、このようなアステカの「戦争」の実像を描写していく。

## 2. アステカの「戦争」

本稿で取りあげるアステカの時代とは、現在のメキシコ市中心部に建設されたナワ（アステカ）系のメシーカ人が築いた都市国家テノチティランと2つの周辺都市国家テツココとトラコパンによって結成された三都市同盟が、広くメソアメリカ文化圏一帯に影響を及ぼしたアステカ王国時代（1428-1521年）を指す（図1）。この時代の歴史的イベントや社会的事象は、植民地時代に編纂された文献史料にも記述が多く、主都テノチティランからの出土遺物も多いため、アステカ史のなかでももっ

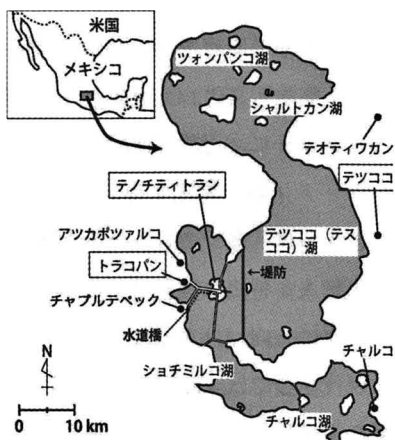


図1 メキシコ盆地と三都市同盟



の戦争観を共有する都市国家間で行われた、生贄の獲得のみを目的とした儀礼的戦闘である。この2つの戦争形態について、以下の節で詳細を述べる。

## 2.1 都市国家間の戦争

都市国家間の戦争の特徴として、戦争の目的、戦闘に参加する戦士の身分、戦争に関連する行為の手順、装束と装備について以下にまとめていく。

### 2.1.1 戦争の目的

この種の戦争の目的は、メキシコ盆地内では相手国の政治経済的支配と貢納品の要求であったが、遠隔地に対してはほぼ貢納品の要求のみと言える。荷駄獣が存在せず、あらゆる移動や運搬が人力で行われたメソアメリカでは、遠隔地への大規模な軍事遠征や移民などは、かかる経費やリスクが大きかった。近隣諸国に対しては政治的にも直接干渉を行ったが、遠隔地においては、一旦貢納品の要求を取り付けると、その都市の政治体制や文化・宗教は維持させるケースが多かった。アステカ王国は急速にその影響力を拡大していったが、遠隔地の領土の獲得には執着せず、政治的な拘束力は小さい支配体制であった。

### 2.1.2 戦士の階級

アステカ社会では戦士は専門職ではなく、訓練を受けた支配層の子弟および志願して訓練を受けた庶民の男子であった。平時は各自の職業に従事していた。ただし階級は存在し、捕獲した捕虜の数に応じて昇格するシステムになっており、装備できる武器や装束で差別化された (Berdan and Anawalt 1997: 187-190) (図3)。戦勝時に功績のあった戦士には、敗戦国の領地や威信財などが賞与として支給された。アステカ王国拡大期には恒常的に戦争状態であったが、平時にも戦士の訓練の場を提供できるよう、後述する「花の戦争」を制度化した。

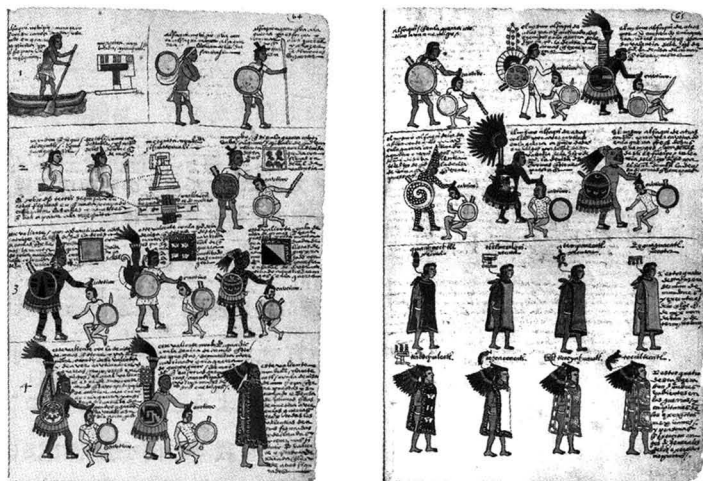


図3 戦士の階級制度（メンドーサ絵文書：fols. 64r, 65r）

### 2.1.3 戦争の手順

戦争の手順は以下の通りであった（Hassig 1988：chap. 7）。まず敵対国とみなした都市に使者を送り交渉をする。ここで交渉が拒絶された場合、象徴的な行為で宣戦布告をする。宣戦布告の象徴的行為には、使者を殺害する、または追いつ返す際にその使者に女装させる、などがある（cf. Durán 1984）。交渉決裂により戦闘が起こり、決着がつくと、戦勝国が捕虜を獲得し、後に生贄として自国の神殿に祀った太陽神に捧げる。取り決めに従い、戦勝国が敗戦国を支配下に治め、貢納品を課す。

ここで「戦争を仕掛ける方」の視点から、当時メキシコ盆地に勢力を誇っていたアスカポツァルコ王国に対して、属国だったテノチティトランが起こした独立戦争（1428年）の経緯を事例として挙げる（Durán 1984：chaps. XXXII-XXXIV）（図4）。この戦争は、三都市同盟結成の契機ともなった。まず、テノチティトランのイツコアトル王は、甥のトラカエレルを使者として送り、アスカポツァルコのマシュトラ王に面会させる。交渉が決裂し、使者であるトラカエレルがマシュトラ王の身体に、死体に塗る軟膏を塗りこみ、武装さ



図4 アスカポツァルコとの戦争の記録  
左側の人物は石片付棍棒を手にしている  
(テレリアーノ・レメンシス絵文書: fol. 31r)

せるという象徴的行為で宣戦布告する。一方で、テノチティトランの民は、アスカポツァルコとの戦争に恐怖し、都から逃げようとする。イツコアトル王は「おまえたちの自由は保障する。敗戦したら我々の肉を食べてよい」と応え、民は「それでは勝利したら、王に仕えます」と約束する。この時点では庶民の兵は存在せず、軍隊は訓練された支配層の子弟のみで組織された。テノチティトラン軍はアスカポツァルコを壊滅状態にし、富を略奪し、戦闘で功績をあげたメシーカ支配層の戦士がアスカポツァルコの領土を分割して支配した。アスカポツァルコはその後、王を戴くことを禁止された。テノチティトランの民はイツコアトルの勝利を承認し、王に仕えることを誓った。

このように、アステカ王国成立時の戦争では、戦闘の当事者は支配層のみで、庶民は勝敗の決着がついてから強い王を選ぶことができた。その後王国の発展と共に、恒常化した戦闘態勢のなかで戦士の特別階級化が顕著になり、庶民も望めば戦士になる訓練を受けられるようになった。ただし、攻撃される側は、庶民も虐殺され、町も破壊された。

#### 2.1.4 装備と兵器

スペイン人が馬を持ち込むまで、メソアメリカ圏内には馬のような機動力のある大型の家畜が存在しなかった。メソアメリカの戦争は基本的に人間対人間の白兵戦であった。また金属器が無く、火器も存在しなかったが、矢で火を放ち火事を起こして街や神殿を焼くことは攻撃の常套手段であった。一



一般的な戦士は、綿のキルト製のヘルメットや防護服、葦または木製の盾をたずさえ、木製の槍、弓と矢、石片を埋め込んだ棍棒を装備していた。この石片付の木製棍棒は、アステカ時代の発明品である（Cervera Obregón 2006）（図 4）。石片付棍棒はそれまでにメソアメリカ圏で使用されていた棍棒の攻撃力を高めるものではあったが、技術革新の産物というほどのものではない。この武器の登場が日常生活を変革するような技術をもたらしたわけでもない。戦争関連の道具類は、武器以外に機能の応用がきくものではなかった。

## 2.2 「花の戦争」

都市国家間の戦争の他に、アステカ社会には太陽神への生贄の確保のために戦闘する儀礼的戦争が制度化されていた。壮麗に着飾った戦士たちが戦場で戦うさまを、アステカの言語であるナワトル語の「花（ショチトル *xochitl*）」と「戦争（ヤオヨトル *yaoyotl*）」を複合語にして「ショチヤオヨトル *xochiyaoyotl*（花の戦争）」と表現したとも考えられている（Carrasco 1998：198-200, Townsend 2009：218）。諸説あるが、メキシコ盆地外への進出を始めた第5代モテクソマ1世が制度化したという記録がもっとも詳しく描写されている（Chimalpáhin 1998：49；Durán 1984：chap. XXVIII）。

「花の戦争」の大きな特徴は、あらかじめ日時を決めた上で、協定を結んだ近隣のアステカ系民族の都市国家と行う、ということである。戦場では捕虜を獲得し、後に生きたまま生贄として神々に捧げることを目的とした。そして華やかな装束に身を包んだ支配層の子弟のみが戦士として参加した。この戦闘は、未熟な戦士の訓練の場も兼ねていた。

「花の戦争」は、戦闘後の生贄の儀礼を主目的とした。「花の戦争」を制度化することで、平時でも太陽神への生贄の枯渇を防ぐことができた。戦勝国にとっては、生贄の儀礼は、自国の優位性を近隣諸国に誇示する機会でもあった。また、モテクソマ1世の治世に相当する1440年代後半から50年代初頭には、アステカ王国史上でも記録的な自然災害が多発した時期だったため、神々

の加護を受けるため大量に生贄が必要になり、この儀礼的戦争を始めたとの解釈もある (Carrasco 1998 : 199)。いずれにせよ、アステカの宗教思想を共有する近隣諸国間でしか成立しない特殊な戦争形態であり、自民族中心主義的思想の表れとも考えられる。モテクソマ1世は「アステカ人以外の野蛮人は神に捧げるに値しない」と語ったとも記録されている (Durán 1984 : chap. XXXVIII)。

### 3. 戦争の図像表現

この章では、実際の物質文化、つまり絵文書、考古遺物、遺構などに残っている戦争の表現について具体例を挙げ、アステカ人が戦争のどのような側面に焦点を当て描写していたかを分析していく。まず、歴史的イベントとして記録された戦争の例を通して、アステカ美術様式と植民地時代の図像表現を比較し、その背景の思想を探る。次に、古典期後期のカカシュトラ遺跡の戦闘シーンが描かれた壁画と、テノチティトランに残る戦士を表現した壁画とを比較することで、戦士の社会的役割について考察する。

#### 3.1 アステカ王国時代と植民地時代の図像の違い

アステカ美術様式とヨーロッパの影響を受けた植民地時代の美術様式の両方で記録が残っている事例として、テノチティトランとその姉妹都市であるトラテロルコとの戦争 (1473 年) の記録を分析する。トラテロルコは、テノチティトランと同じ湖上の島に建設された都市で、当時のメソアメリカでは最大規模の市場を有する交易の中心都市であった。1473 年の戦争は、テノチティトランの支配に対して反旗を翻したトラテロルコが、テノチティトランからの独立をかけて戦い敗北した戦争である (Durán : chaps. XXXII-XXXIV)。図 5 は、前述のアスカポツァルコとの戦いのシーン (図 4) が収録されているテレリアーノ・レメンシス絵文書の一コマである (Quiñones

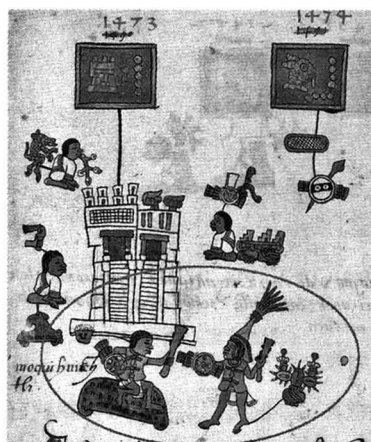


図5 トラテロルコとの戦争の記録  
(枠内)

双方とも石片付棍棒を手にしている (テレリアーノ・レメンシス絵文書：fol. 36v)

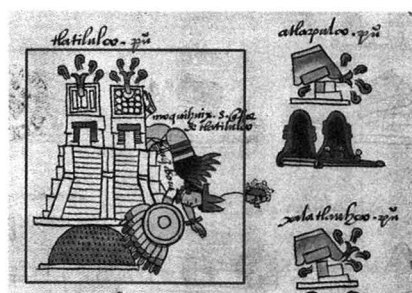


図6 トラテロルコとの戦争の記録 (枠内)  
(メンドーサ絵文書：fol. 10r)



図7 モテクソマ1世の戦勝記念石像  
メキシコ国立人類学博物館所蔵  
224×67-78 cm (Franch, et. al  
1992：199)

Keber 1995：76, 221-222)。テレリアーノ・レメンシス絵文書は、植民地時代に編纂されたアステカ王国時代の絵文書の写本で、アステカ美術様式を強く表現している。ここではそれぞれの都市の代表的人物が一对一で交戦している様子が描かれている。

アステカ様式のもう一つの表現法としてよく見られるのが、図6のメンドーサ絵文書のような「燃える神殿」である (Berdan and Anawalt 1997：25)。敗北都市のシンボルを伴った神殿が燃えているという表現で、絵文書の記録者側の都市がその都市との戦争に勝利したことを意味する。また石像彫刻などには、勝者が敗者の髪をつかんでいる描写も多く見られる (図7)。以上の



図8 トラテロルコとの戦闘 (Durán 1984 : pls. 21, 22)

3例はアステカ美術様式の典型であるが、図像に躍動感や人物の表情などは表現されず、アイコン的であることが特徴である。歴史的事件として勝利を記録することが優先され、戦闘そのものには関心が向いていないことが観察できる。

一方で、ヨーロッパ美術の影響を強く受けた図像では、同じ戦争も戦場の描写になっており、戦士以外にも戦場の音楽隊など、さまざまな役割の人々や、血を流して倒れる死傷者も描かれている(図8)。このような群像の戦闘シーンはヨーロッパ美術様式由来と考えられ、戦闘の激しさや残虐性を通して表現された自国の優位性を強調しているように見える。

### 3.2 戦士の描写

メソアメリカ文化圏において、通時的に戦闘シーンが存在しなかったわけではない。メキシコ中部のプエブラ・トラスカラ盆地にアステカ以前に栄えた都市カカシュトラ(c. 後650-900年)からは、多くの壁画が発掘されている。主要基壇の上に建造された「建造物B」と呼ばれる構造物の正面スロープに、激しい戦闘シーンが描かれた壁画が残っている(図9, 10)。ここには、後650年頃のカカシュトラの民であるオルメカ・シカランカ人とマヤ人の戦闘シーンが描写されている。人物像はほぼ等身大の大きさで、正面階段を挟んで左右に長さ26メートルに渡って描かれている。その一部が図11のような図像で、頬に矢が刺さった高位のマヤ人戦士の姿や、首を落とされ、切り

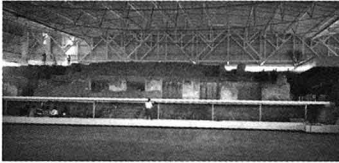


図9 カカシュトラ「建造物 B」正面（筆者撮影）



図10 カカシュトラ「建造物 B」正面壁画（筆者撮影）

裂かれた腹から内臓が流れ出て死んで行く兵士の様子が写實的に描写されている。当然ながらオルメカ・シカランカが勝利している描写である。

都の主要広場に掲げられた写實的で残酷な戦闘シーンは、見る者達に繰り返しカカシュトラの勝利を経験させると同時に、カカシュトラへの反抗に対する躊躇や恐怖を与える効果があっただろう。このような壁画は、都市の民衆だけではなく来訪者に対しても勝利と威圧感を誇示し、大きな政治的効果があったと考えられる。

一方で、テノチティトランやアステカ関連の遺跡からは、公共の場での戦闘シーンや血まみれの敵戦士の描写を伴う遺物や遺構は、現時点では発見されていない。戦争に関連するテーマで多く見られる描写は、前述の勝利の記録や戦士の行進のみである。テノチティトランの祭祀地区でも比較的壁画が残っている建造物として、主神殿の北側に位置する「鷲の家」が挙げられる。ここからは戦士の図像や彫像が多く発掘されており、戦士に関連する儀礼の舞台であったと考えられている。

鷲の家の内部には、高さ 50 センチほどのベンチ状の構造物の側面に、計 201 人の壮麗に武装した戦士の行進が描写されている（López Luján 2006：Vol. I, 110）（図 11）。アステカ王国の支配領域を安定的に維持した、第 6 代アシャヤカトル王の時期に相当する図像である。人物像は全て横向きで、「自己供儀と血」のシンボルである草のボールに向かって行進している。草



図 11 「鷲の家」の壁画 (López Luján 2006 : Vol. II, 555)

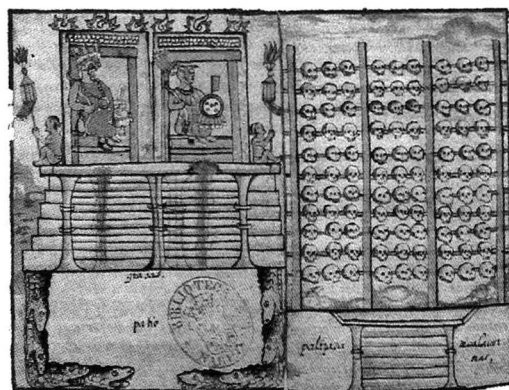


図 12 テノチティラン主神殿と頭蓋骨の祭壇 (Durán 1984 : Vol. II, pl. 4)

のボールと戦士の組み合わせには、戦争、生贄、血などの象徴性があると解釈されている (López Luján 2006 : Vol. I, 109-110)。戦士階級が、単なる戦争での勝利だけではなく、アステカ特有の宗教思想の肯定と維持にも貢献していたことが観察できる。

以上のことから、先スペイン期のアステカの図像表現では、戦闘自体を表現することは重要視されていなかった、または必要無かった、と考えられる。アステカ社会では、戦場での殺戮が主目的ではない戦争観が共有されていた。しかし殺戮行為は生贄の儀礼という形で、戦後に公共の場で行われた。残酷な戦闘シーンを掲示するよりも、その場で生きた戦争捕虜の心臓を引き抜き、その頭蓋骨を主神殿脇の頭蓋骨の神殿に陳列する方が、政治的效果としては大きかったかもしれない (図 12)。

#### 4. アステカの「戦争」の機能

以上をふまえて、アステカ社会における戦争の機能を、経済的、政治的、宗教的側面から考察する。アステカ社会では、経済、政治、宗教は現代社会で認識されるほど区別されておらず、相互関連していたため、以下に挙げる機能は必ずしも明確に分離しておらず、多くの場合重複していることを先に述べておく。

まず経済的に、戦争は貢納品獲得のための敵対都市への説得の手段であり、戦後に経済活動をさせるためにも、対戦都市の破壊は得策とはみなされなかったと考えられる (Hassig 1985, Berdan and Anawalt 1997)。アステカ王国の戦略は、被征服都市にその土地の産物以外の品を課すことで、支配下諸都市が自発的に交換網を拡張、構築していくことを期待するものだった。王国は、インフラなどの設備投資の手間をかけることもなく、メソアメリカ文化圏を超えた交換網の構築と、大量の富の獲得を実現できた (Berdan and Smith 2003)。また、アステカ王国が諸都市に課した貢納品リストを収録したメンドーサ絵文書の記録によると、多くの都市の貢納品にアステカの高位の戦士の装束が含まれている (図 13) (Berdan and Anawalt 1997: 42-47)。貢納品を通して、アステカ王国の戦士階級の社会的価値や戦闘行為の政治的・宗教的意味を周知し教育する機能も兼ねていたとも考えられる。

一連の戦争行為は、対外的には政治的な外交交渉の一部でもあった。また戦士階級を優遇し宗教的にも「生贄の獲得」という不可欠な役割を付すことで、対内的 (王国の一般庶民) には、戦争に勝利する意義をアピールできただろう。戦士を高位に位置づける階級制度は、庶民に対しても開かれており、社会階級の上昇を可能にした。より多くの貢納品や威信財を獲得して王国を豊かにすることで、王国への庶民の帰属意識を強化する効果もあっただろう。また、戦勝後の主都の神殿での生贄の儀礼は、民衆にも戦争の意義を直接体

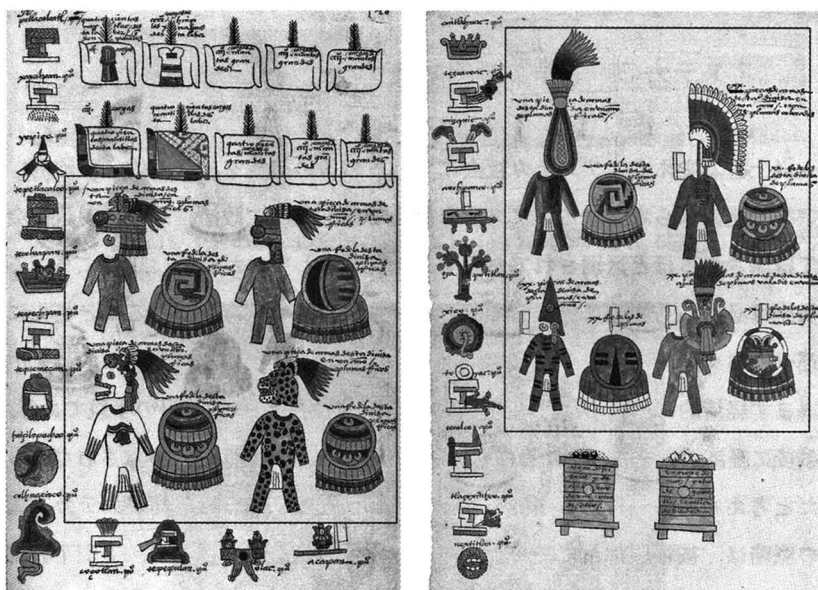


図13 貢納品としての戦士の装束（枠内）（メンドーサ絵文書：fol. 20r, 20v）

験させ、抵抗意識を弱める政治的效果があったとも考えられる。「花の戦争」も並行して行うことで主神殿における生贄の儀礼を頻繁に行い、同盟国や敵対国の王も招待してその儀礼を見せることで、対外的にもアステカ王国への敵対心を弱める心理的效果が期待できた、という解釈もある（Carrasco 1998：199；Smith 2012：225）。

戦争は、太陽神への生贄を獲得するという大義名分により、他地域への侵略や戦争行為を思想的に正当化できるという宗教的機能もあった。王国の拡大に伴う生贄儀礼の大規模化は、太陽神信仰関連の美術様式や物質文化が複雑化し、強調されていく様子からも観察できる（井関 2010）。アステカの戦争では、道具としての金属加工技術の欠如による武器製造における技術的な限界と、機動力のある大型動物が存在しなかったことから、敵地または戦地での大量殺戮にかかる労力は、少なくとも同時代のヨーロッパ社会よりも格段に大きかったはずである。しかし敵対国の兵力を損なわせ、アステカ王国



の優勢を示すための戦士の殺戮行為は、太陽神への供犠という形で宗教儀礼の一部として昇華され、戦場ではなく平時の公共の場で民衆に共有された。

アステカの戦争は、政治的組織体による正当化された暴力であることは、人類史上のほとんどの「戦争」と同様である。しかし多くの場合、異質な存在に対する対抗心や敵の排除というよりは、経済的な侵略戦争であり、被征服地を壊滅状態に陥れたり、宗教を強要したり、現地の政治制度を根本からくつがえすような行為は重要視されなかった。反対に、被征服地には貢納と交換（交易）という経済活動に参加させるため、極力その社会体制を残す必要があった。つまりアステカ社会では、戦争が変革をもたらすというよりは社会体制を維持し拡大するための戦略的制度であったという点で、我々現代人がイメージする「戦争」とは異なっている。

## おわりに

アステカの戦争は、劇的な変革や破壊を意図するものではなく、政治・経済・宗教が有機的に連動したアステカ社会を維持し、王国の民や被征服都市に繰り返すアステカ王国運営上のルールを体験的に確認させるために、必要不可欠な社会制度として機能していた。被征服地への徹底的な統治を行わなかったことから反乱も度々起きたが、政治・経済・宗教上のルールの確認作業として、戦争行為を新規に行う格好の口実になったはずである。

また、戦争が火力、破壊力や殺傷力を追求した技術革新に結びついていなかったことも、アステカ文化の特徴の一つである。人類史では火薬や原子力などの科学技術の発展は、直接兵器開発とも結びついており、文明の発展と大量殺戮を目的とした兵器開発は両輪として技術革新に貢献してきた。しかし金属器や大型動物が存在しなかったアステカ社会では、戦争で使用される武器や武具に必要とされるのは、特定の用途に特化した手工業技術であり、生活技術の向上とは直接結びついていない。このような戦争に関連する技術

の方向性の違いも興味深い。

アステカの戦争観の研究は、人類史における戦争に関連する社会現象の多様性や、現代の戦争の特異性を考えさせるものでもある。より広いコンテクストでアステカの戦争文化を位置づけるために、今後考えられる研究テーマや方法論を以下に3点まとめておく。

まず、戦争に関連する思想的背景を明らかにする目的で、戦闘スタイルや武器の変遷をメソアメリカ文化圏全体で通時的・共時的に分析する研究法が挙げられる。アステカと同時代の他地域の戦争文化とも比較することで、地理的にどのくらいの範囲まで、アステカの戦争観が共有されていたのかも観察できる。例えば、第6代アシャヤトル王の時代にメキシコ西部のタラスコ人との戦争で大敗している記録があるので (Durán 1984 : chap. XXXVII), アステカとタラスコの戦争文化に違いがあったことも考えられる。

環境変動の視点から、戦争形態の変化を分析する研究も可能であろう。「花の戦争」のように、大規模な自然災害を機に、新たな戦争形態が創作された可能性もある。環境変動や社会変化の時期と照らし合わせて、戦争文化を表現した物質文化から形態の差異を見出すことも、戦争観の変化を追う一つの方法である。

また、言語表現から、アステカ人 (ナワトル語話者) がどのように「戦争」を認識していたかを認知言語学の方法論を応用して分析することも、意義ある研究の一つとなると考えている (認知言語理論を活用した分析例として Izeki 2008)。異文化の現象を描写する上で、完全な訳語をみつけることは不可能である。現代社会における似たような現象や言葉を活用して翻訳することになるが、その現象の含有しているどの要素を持って同じ言葉で表現するのかは明らかにしなければならない (Sheets 2003 : 289)。現代に特有の概念がおよぼす影響や誤解を考慮した上で、異文化を実証的かつ広いコンテクストのなかで比較分析しながら位置づけて説明することが重要である。

## 謝 辞

本論は、平成 21-25 年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(領域代表：青山和夫)の成果の一部である。

## 参考文献

- Aguilar-Moreno, M. (2007) *Handbook to Life in the Aztec World*. Oxford University Press, Oxford and New York
- Alcina Franch, J., M. León-Portilla, and E. Matos Moctezuma, eds. (1992) *Azteca-Mexica*. Sociedad Estatal Quinto Centenario. 1992, Mexico.
- Berdan, F. F. (2005) *The Aztecs of Central Mexico. An Imperial Society*. Second edition. Thomson Wadsworth, Belmont, CA.
- Berdan, F. F. and P. R. Anawalt (1997) *The Essential Codex Mendoza*. University of California Press, Berkeley. (本文中の図版は『メンドーサ絵文書』で記載)
- Berdan, F. F. and M. E. Smith (2003) The Aztec Empire. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by M. E. Smith and F. F. Berdan, pp. 67-72. The University Press of Utah, Salt Lake City.
- Carrasco, D., with S. Sessions (1998) *Daily Life of the Aztecs. People of the Sun and Earth*. Greenwood Press, Westport and London.
- Cervera Obregón, M. A. (2006) The macuahuitl: an innovative weapon of the Late Post-Classic in Mesoamerica. *Arms & Armor*, Vol. 3, No. 2: 127-148.
- Chimalpáhin, D. (1998) *Las ocho relaciones y el memorial de Colhuacan*. Vol. II, Cien de México, Mexico.
- マーチン・ファン・クレフェルト (石津朋之監訳) (2011)『戦争の変遷』原書房 (M. Cleaveland *The Transformation of War*. Free Press, New York, 1991)
- Duran, D. (1984) *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*. Vol. I, II. Editorial Porrúa, Mexico.
- アザー・ガット (石津朋之、永末聡、山本文史監訳、「歴史と戦争研究会」訳) (2012)『文明と戦争』上下巻, 中央公論新社 (A. Gat *War in Human Civilizations*. Oxford University Press, Oxford, 2008)
- Hassig, R. (1985) *Trade, Tribute, and Transportation*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Hassig, R. (1988) *Aztec Warfare*. University of Oklahoma Press, Norman.
- マイケル・ハワード (奥村房夫、奥村大作共訳) (2010)『改訂版 ヨーロッパ史における戦争』中公文庫 (Michael Howard (2009) *War in European History*. Oxford University Press, Oxford.)

石津朋之 (2013) 『戦争学原論』 筑摩書房

Izeki, M. (2008) *Conceptualization of 'Xihuitl': History, Environment and Cultural Dynamics in Postclassic Mexico Cognition*. BAR International Series 1863. Archaeopress, Oxford.

井関睦美 (2010) 「アステカ王国拡大期におけるコヨルシャウキ女神の図像変化」『古代アメリカ』13: 41-52

López Luján, L. (2006) *La Casa de las Águilas. Un ejemplo de la arquitectura religiosa de Tenochtitlan*. Vol. I, II. CONACULTA and INAH, Mexico.

ウィリアム・マクニール (高橋均訳) (2002) 『戦争の世界史』 刀水書房 (W. H. McNeil (1982) *The Pursuit of Power*. University of Chicago Press, Chicago.)

Quiñones Keber, E. (1995) *Codex Telleriano-Remensis*. University of Texas Press, Austin. (本文中の図版は『テレリアーノ・レメンシス絵文書』で記載)

Sheets, P. D. (2003) Warfare in Ancient Mesoamerica. In *Ancient Mesoamerican Warfare*, edited by M. K. Brown and T. W. Stanton, pp. 287-302. AltaMira Press, Walnut Creek.

Smith, M. E. (2012) *The Aztecs*. Third edition. Wiley-Blackwell, Malden, MA, Oxford, UK, and Victoria, Australia.

Townsend, R. (2009) *The Aztec*. Third Edition. Thames and Hudson, London.

(いぜき・むつみ 商学部准教授)